

音楽によるアウトリーチ活動におけるプログラムに関する一考察 —ビーチングの3つの目標を基に—

末 永 雅 子*・高 橋 千 絵*

A Study of Outreach Programs in Music Based on Beeching's Three Goals

Masako SUENAGA, Chie TAKAHASHI

Outreach activities are meant to provide music to local citizens who have little exposure to music in their daily life. Outreach activities aimed at children have an especially meaningful impact, in that they help children feel more familiar with art and artists, train the art professionals of the future, and also provide the participants with a better understanding of art and artists. In this research, we conducted effective art appreciation classes and workshops based on the three goals listed in Outreach Activities by Angela Myles Beeching. Introductory workshops about and hands-on experience with musical instruments lead to encourage the active participation of children and increase their interest and concern for music. In addition, the children showed greater interest and appreciation when they knew how to listen to and enjoy music, through the knowledge acquired from their workshop experience. However, children who merely participate in outreach activities for fun will not experience increased closeness to the arts and artists that is the main purpose of outreach activities. To use their acquired knowledge and experience, it is necessary for children to have a willingness to experience music on a higher level. For that, it is important for children to experience the joy of music as an audience through outreach activities. Practitioners, through outreach activities, are required to create programs which will give opportunities to acquire knowledge and experience and impart the joy of the natural beauty and fun of music. In order to develop this appreciation, it is necessary to continue outreach and explore the possibility of more effective activities, including which to pursue and how to conduct them.

キーワード：アウトリーチ、知識、体験、参加意識

Keywords : Outreach, Knowledge, Experience, Sense of participation

はじめに

子どもを対象とした音楽によるアウトリーチは、「聴く」「見る」「触れる（参加する）」活動に

より子どもたちの好奇心を刺激し、興味と関心を音楽へと引きつけ、音楽についてもっと知りたいという求知心へとつなげていくための活動であ

* 広島文化学園大学 学芸学部 音楽学科
Hiroshima Bunka Gakuen University Faculty of Arts and Sciences Department of Music

る。

アンジェラ・マイルズ・ビーチング (Angela Myles Beeching) は、『BEYONDO TALENT 音楽家を成功に導く12章』の中で、アウトリーチ活動の目標として次の3点を挙げている。¹⁾

- ①参加者を巻き込むこと、参加意識を持たせること。
- ②前向きに聴く技術を伝え、磨きをかけられるように導くこと。
- ③参加者を、音楽がすばらしいと思える「秘密」に触れさせてあげること。

そして、この目標を達成するために、実践者に対し以下のような8つの質問を投げかけている。²⁾

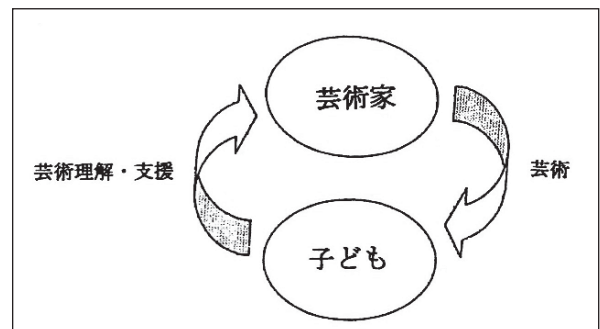
- ①聴き手が何かを学ぶことを目的とするのか？
それとも経験すること？それともどちらも？
- ②具体的に、特に、どのレパートリーを使いたいか？それはなぜ？
- ③聴き手はだれですか？地元の高校生？老人ホーム？ロータリークラブ？
- ④具体的に、どの作品について、あるいはどの楽章について、どんな考えやコンセプトを伝えたいですか？それはなぜ？
- ⑤どんな形で、どんな種類の参加型の活動を盛り込みますか？それはどうして？
- ⑥聴き手は何を得ることができますか？何か特定のスキルを磨けるようにしたいと考えていますか？
- ⑦どんなことを学んでほしいと思っていますか？
- ⑧聴き手が積極的に音楽と関わるために、あなたはどんな風に助け舟を出せますか？

このことから、アウトリーチのプログラム作りには、実践者が活動を通して何を伝えたいのか、何を聴かせたいかを明確にすることが必要であり、その明確な裏付けを基にした計画的な進行と活動内容への創意工夫が重要であると考えた。

そこで本研究では、実践活動を通して、子どもたちの好奇心を刺激し、楽器と音楽に対する興味と関心を引き出すための効果的なプログラムとはどのようなものかを、ビーチングの3つの目標と8つの質問を基に検討した。

I. アウトリーチ活動について

アウトリーチ (Outreach) とは、「手をさしのべる」という意味で、主に福祉などの分野における地域社会への奉仕活動、公共機関の現場出張サービスなどの意味で多用されている。音楽におけるアウトリーチ活動は、普段コンサートホールで開催される演奏会に行かない、もしくは行きたくても行けない人々に直接音楽家が出向き音楽を届ける活動を行うもので、「芸術普及活動」あるいは「教育普及活動」とも言うことができる。林 (近藤) 睦は『音楽のアウトリーチ活動に関する研究－音楽家と学校の連携を中心に－』の中で、「子どもを対象にしてアウトリーチ活動を行うことは、子どもにとっては芸術や芸術家を身近に感じるきっかけとなりうることであり、芸術家や芸術団体、芸術機関から言えば、鑑賞者開発に直接つながる」³⁾と述べており、以下のような「芸術の社会循環を生み出す」⁴⁾としている。



(図1) 芸術の社会循環

II. 活動内容の概要

今回の実践は、広島県府中町立府中南公民館からの依頼によるものである。公民館からの要望は、「子どもたちに、学校では見る機会のない楽器に触れさせたい」「大きな楽器編成による演奏を聴かせたい」「90分のプログラムを組んでほしい」の3点だった。これらの公民館の要望とともにビーチングの8つの質問①～③を考慮し、計画を立てた。

- ①聴き手が何かを学ぶことを目的とするのか？
それとも経験すること？それともどちらも？

オーボエとピアノの楽器体験を盛り込んだ「ワークショップ型アウトリーチ」と、2台のピアノと2台の電子オルガンによる演奏「鑑賞型アウトリーチ」の2部構成とし、楽器に関する知識

の習得と体験の両方を実践の目的とした。

②具体的に、特に、どのレパートリーを使いたいか？それはなぜ？

公民館からの要望に応えるために、子どもにとっては見る機会の少ないと思われるオーボエの紹介と、ピアノと電子オルガンを使った大編成に

よる演奏を選んだ。

③聴き手はだれですか？地元の高校生？老人ホーム？ロータリークラブ？

対象は、公民館に参加を申し込んだ小学生とその保護者である。

全体の概要は以下の（図2）の通りである。

対象者	広島県府中町立府中南公民館 館外学習申込み者 小学1年生～6年生（男子3名、女子13名）と、保護者（7名）
時期	平成23年2月5日 10：30～12：00（90分）
場所	広島文化学園大学 広島 長束キャンパス 音楽講義室
内容	第1部 「ピアノとオーボエの不思議」（50分） ～音の出る仕組みや、音楽の楽しさを、体験しながら学んでいこう～ 実践者：末永雅子（ピアノ）、高橋千絵（オーボエ）
	第2部 ピアノと電子オルガン、6人12手による「動物の謝肉祭」（30分） 演奏者：末永雅子（ピアノ） 広島文化学園大学学芸学部学生7名 （詩の朗読とピアノ、電子オルガン、クラリネットの演奏）

（図2）アウトリーチ活動の概要

1. 選曲と進行内容の計画

今回プログラムを作成するにあたり、ピーチングの8つの質問④～⑦について検討し、選曲と進行内容の計画を行った。

④具体的に、どの作品について、あるいはどの楽章について、どんな考えやコンセプトを伝えたいですか？それはなぜ？
⑤どんな形で、どんな種類の参加型の活動を盛り込みますか？それはどうして？
⑥聴き手は何を得ることが出来ますか？何か特定のスキルを磨けるようにしたいと考えていますか？
⑦どんなことを学んでほしいと思っていますか？

1) 第1部の選曲と進行内容の計画

(1) オーボエの紹介と体験活動

子どもがオーボエの楽器の仕組みや音色について知ること、リード試奏体験や楽器に触れる体験を通してオーボエに親しみを感じることを2点を目的にプログラムを組み立てることとした。詳しい曲目と選曲理由は次の（図3）の通りである。

進行内容は次の（図4）の通りである。

楽器の仕組みを詳しく伝えるためにプロジェクターを使用し、フランスの楽器工房でオーボエが作られる過程を写真で紹介した。

子どもにキィを押させる体験活動は、複雑な運指の組み合わせによって音程を変えることができるということを強調し、後に出てくるピアノとの違いを意識させるために行った。

楽器体験では、子どもにとって身近な素材であるストローで作ったストロー笛と本物のオーボエリードの試奏体験を行うとともに、実際にストローで作ったオーボエ用リードを楽器に装着し「チルメラ」を演奏することで、リードの素材による音の違いを伝え、オーボエの音色づくりにはリードが欠かせない事を子どもたちに伝えるようにした。

(2) ピアノの紹介と体験活動の選曲と進行内容の計画

オーボエ同様の方法で、選曲と進行内容を検討した。

ピアノはオーボエと違い、子どもたちにとってなじみのある楽器である。ピアノの意外な一面を知ることによって、子どもの興味を深く引きつけることを目的とし、ピアノの下にもぐって音を聴

演奏曲目	選曲理由
チャイコフスキー作曲 「白鳥の湖」より“情景”	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエがなじみのない楽器であることを想定し、テレビなどで意外と身近に音を聞くことのできる楽器であることを伝える ・オーボエで一番有名な旋律で、子どもに「知っている」という親しみを感じさせる
大島ミチル作曲「風笛」	<ul style="list-style-type: none"> ・複雑な運指の組み合わせで音程を変える事を伝える ・音域が広く、さまざまな運指を見せることができる ・オーボエの名曲であり高音域の伸びやかな美しい旋律を聴かせることができる
「チャルメラ」	<ul style="list-style-type: none"> ・リードの素材が変わることで音色が大きく変化することを知りオーボエ奏者にとってリード作りが大切な作業であることを伝える ・オーボエで美しい音色を出すためのリード作り ・ストローで作成したリードで演奏するため、出てくる音色に似合った旋律を選んだ
ブリテン作曲 「オヴィディウスによる6つの変容」より“バッカス”	<ul style="list-style-type: none"> ・リード作りの手間以上に演奏の喜びが味わえる楽器 ・オーボエの充実した表現力と音色の多彩さを伝える ・短い作品でありながら「酔っぱらいの千鳥足」「女性たちのおしゃべり」「走り回る子どもたち」という3つの場面を音楽で分かりやすく表現している

(図3) オーボエの紹介と体験活動の選曲とその理由

内容	時間	④曲目	⑤方法	⑥聴き手が何を 特定のスキルを磨けるか	⑦どんなことを 学んでほしいか	
第1部 オーボエの紹介と体験活動	導入	4分	「白鳥の湖」より“情景”	<ul style="list-style-type: none"> ・座席の後方から登場しインパクトを与える 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエを身近な楽器として受け入れる ・オーボエの音色を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエはCMやドラマなどテレビでもよく耳にする楽器である
	楽器紹介	3分	「風笛」	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器に触れる体験(キーを押す) ・プロジェクター使用 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器の仕組みを知る ・運指の組み合わせによって音が変わることを知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・息を使って音を出す「管楽器」 ・木でできている「木管楽器」 ・楽器の仕組み
	楽器体験	10分	「チャルメラ」(ストローリード)	<ul style="list-style-type: none"> ・リード材の配布 ・ストローリード&オーボエリード試奏体験 ・リード工具の展示と実演 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな表情を出すための秘密はリードにあることを知る ・リードが手作りのため、奏者の好きな音色を選んで出すことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の楽器と違い、最後の仕上げは演奏者が行う ・リード作りはオーボエ奏者にとって大切な作業である ・リードによる音色の違い
	演奏	3分	「オヴィディウスによる6つの変容」より“バッカス”	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏内容に合わせて体の動きをつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエは色々な表情を表現できる楽器であることを知る ・曲想の変化に気をつけて聴くことができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエを演奏する理由 ・表情豊かな楽器 ・色々なオーボエの音色に注目させる

(図4) オーボエの紹介と体験活動の進行内容

く、弦の共鳴と残響を聴く、内部を覗く、部品に触れるなどの普段できない体験を盛り込んだ選曲

とプログラム作成を行った。

詳しい曲目と選曲理由および、進行内容は次の

(図5)の通りである。

演奏曲目	選曲理由
ショパン作曲「ノクターン」	・装飾音が美しくピアノの特徴を伝えることができる・子どもたちにもなじみのある曲である
プロコフィエフ作曲「ロミオとジュリエット」より	・低音と高音を効果的に使い、大音量の迫力を子どもに印象付けることができる ・CMでよく知られている曲である
西村朗作曲「星の鏡」	・ソステヌートペダルとダンパーペダルを多用するめずらしい奏法を使った作品である ・7分間の静かな曲であるため、子どもたちが静かな音の響きにじっと耳をすませるという経験によって集中力と聴く力を養うことができると考えた

(図5) ピアノの紹介と体験活動の選曲とその理由

内容	時間	④曲目	⑤方法	⑥聴き手が何を 特定のスキルを磨けるか	⑦どんなことを 学んでほしいか	
第1部 ピアノの紹介と体験活動	導入	2分	「ノクターン」	・オーボエ奏者の退場とともに演奏開始	・聴いたことのある楽曲の演奏により意識をピアノへ移動させる	・オーボエからピアノへ注意を向ける
	楽器紹介	3分	「ムーンライト」(オルゴール)	・オルゴールを使って、響きの増大を体験	・ピアノの豊かな響きは、木と大きな鉄骨フレームから作り出されていることを知る	・ピアノの主要な素材は木。部位によって、いろいろな木を使っている ・中を支える鉄骨フレーム
	楽器体験	5分	「ロミオとジュリエット」より	・弦、ハンマー、ヘッド ・ウイッペン・ダンパーヘッドなどのパーツを手にとって見る ・ピアノの下にもぐって音を聴く	・ピアノの音が出るしくみを知る ・ピアノが複雑なアクションを持っていることを知る	・グランドピアノの中には多くの部品が使われている
	演奏	10分	「星の鏡」	・空調を切るなど静かな環境を整える	・3本のペダルのそれぞれの役割について説明 ・ピアノが作り出すさまざまな音色の違いを感じさせる	・弦の共鳴する音、残響の最後まで、《耳をすませて集中して音を聴く》という体験をする

(図6) ピアノの紹介と体験活動の進行内容

楽器紹介では、木と鉄骨がピアノの豊かな響きを作っていることを伝えるために、オルゴールをピアノの蓋や内部に乗せて鳴らし、オルゴールの小さな音が増幅するという実験を行った。

楽器体験での、ハンマーヘッド、ウイッペンなどの部品は、ピアノ1台分を用意し、子ども全員が手にす

ることができるように、また、音域による部品の大きさの違いを比べることができるように考慮した。

(3) オーボエとピアノのアンサンブルの選曲と進行内容の計画

独奏とは違う音楽の広がりや、音色・響きの変

化を伝えるため、アンサンブルの演奏を第1部の締めくくりとして取り入れた。詳しい曲目と選曲

理由は次の(図7)の通りである。

演奏曲目	選曲理由
サン＝サーンス作曲 「オーボエ・ソナタ」より 第1・3楽章	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエとピアノ、それぞれの楽器の特徴を生かしながらも、アンサンブルとしての美しさを兼ね備えた名曲 ・ゆったりとした会話のような1楽章と、三連符によるリズムの掛け合いが面白い3楽章を選んだ

(図7) オーボエとピアノによるアンサンブル選曲とその理由

進行内容は次の(図8)の通りである

内容	時間	④曲目	⑤方法	⑥聴き手が何を 特定のスキルを磨けるか	⑦どんなことを 学んでほしいか	
第1部 オーボエとピアノ	演奏	8分	「オーボエソナタ」より第1・3楽章	<ul style="list-style-type: none"> ・演奏しながら掛け合いの部分が分るように、少し大きめに体を動かす 	<ul style="list-style-type: none"> ・オーボエとピアノ、それぞれ1つの楽器だけの演奏も楽しいけれど一緒に演奏するともっと楽しい ・オーボエとピアノのアンサンブルが美しい曲 	<ul style="list-style-type: none"> ・会話のような掛け合い。音の色彩感など感じ取らせる ・楽章による曲想の変化に気付かせる
	まとめ	1分			<ul style="list-style-type: none"> ・楽器のさまざまな秘密を知ること、音楽を聴くときの楽しみ方が変わる ・さまざまな楽器や音楽に興味を持ってほしい 	

(図8) オーボエとピアノのアンサンブルの進行内容

変化の大きい2つの楽章を演奏することにより、子どもたちが曲想や、音楽表現の変化を感じ取り、最後まで興味深く演奏を聴くことができるようにした。

2) 第2部の選曲と進行内容の計画

大きな編成による豊かな響きと変化に富んだ迫力のある演奏を聴かせるための選曲をし、子どもたちのイメージを膨らませることを目的に絵本の朗読と映像を加えた。詳しい曲目と選曲理由は次の(図9)の通りである。

演奏曲目	選曲理由
サン＝サーンス作曲 「動物の謝肉祭」より ・序曲 ・ぞう ・カンガルー ・水族館 ・化石 ・白鳥 ・終曲	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちが30分間飽きることなく、興味を持って音楽を楽しめるよう、変化に富んだ曲がいくつかに分かれており、ストーリー性のある作品を選んだ ・オリジナルがオーケストラ作品であるため、アレンジの工夫ができ、電子オルガンによる演奏効果の拡大や、大きな編成によるアンサンブルのダイナミックな響きと音楽の広がりを伝えることができる ・音楽的にも優れた名曲である

(図9) 第2部の選曲とその理由

演奏するにあたり、オーケストラと2台ピアノ用の楽譜を基に、電子オルガン2台とピアノ2台用アレンジを加え、子どもの興味を引くために「ぞうの鳴き声」「水の音」「泡の音」などの効果音や「ハープ」「チェロ」などの楽器の音色や効果的な演奏方法を工夫した。

序曲と終曲は、ピアノ2台を6人の演奏者12手で演奏するという華やかで珍しいアンサンブル形

態とし、さらに、1曲ごとに電子オルガンとピアノ奏者の人数と組み合わせを変え、音色や表現に変化をつけるようなアレンジをした。

映像と言葉を音楽に結びつけることによって、子どもの想像力を膨らませ、音楽鑑賞の楽しさを伝えたいと考えた。

進行内容は次の(図10)の通りである。

内 容	時間	④曲目	⑤方法	⑥聴き手が何を 特定のスキルを磨けるか	⑦どんなことを 学んでほしいか	
第2部 動物の謝肉祭	導 入	3分	・ハープの音色 ・木琴の音色 ・チェロの音色 ・ぞうの鳴き声 ・水泡の音色	・クイズ形式で音色を紹介することで、子どもを参加させる	・電子オルガンの説明をして、作り出した音色を聴かせる	・音色を作るためにタッチやアレンジに工夫をしている
	演 奏 (音楽と朗読)	25分	「動物の謝肉祭」より ・序曲 ・ぞう ・カンガルー ・水族館 ・化石 ・白鳥 ・終曲	・絵本「動物たちの謝肉祭サン＝サーンスの音楽に誘われて」の絵(きたむらさとし)をスライドで映す	・絵本「動物たちの謝肉祭サン＝サーンスの音楽に誘われて」の詩の朗読と演奏 [詩 エイドリアン ・ミッチェル 訳 四元康祐]	・大きなアンサンブルによる、豊かな響きと迫力のある演奏を体験させる ・音楽に合わせた詩の朗読と映像によって、豊かなイメージを抱かせる ・アンサンブルの鑑賞の楽しみを体験させる
	まとめ	2分			・曲中に出てきたさまざまな音色 ・「化石」に登場したクラリネットの楽器紹介	

(図10) 第2部の進行内容

子どものイメージを広げるためにプロジェクターを使い映像を映し出した。また、曲間の詩の朗読は、男子学生と女子学生の2名で行い、詩の内容に合わせて交互に朗読し変化をつけた。

2. 視覚的アプローチの工夫

ビーチングの8つの質問の⑧により、視覚的アプローチの工夫を行った。

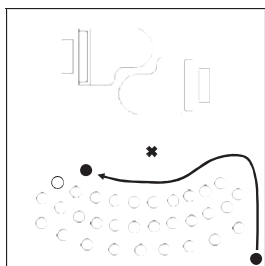
⑧聴き手が積極的に音楽と関わるために、あなたはどんな風に助け舟を出せますか？

子どもたちにより深く楽器の魅力を伝えるために、近くで音を聴く場面と遠くで響きを含めた音色を聴かせる場面を設定した。それぞれの目的・項目に合わせて実践者の立ち位置と子どもたちとの距離を工夫し、また、子どもを着席させる、前方へ集めるなどの参加形態の変化をつけた。

1) 第1部の視覚的アプローチの工夫

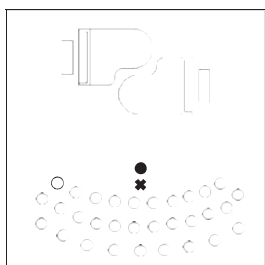
(1) オーボエの紹介と体験活動

オーボエという知らない楽器の音色に対する期待感を高めるために、導入部分は子どもたちの見ていない座席後方から演奏しながら登場した。



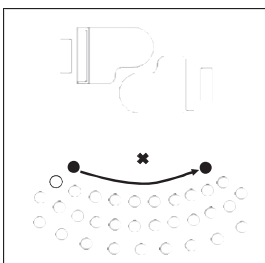
(図11) オーボエを演奏しながら登場する場面

奏者の運指、息遣い、吹き口などが分かるように子どもに近い場所で演奏した。また、ブリテン作曲の“バックカス”演奏時は、「よっばらいの千鳥足」の部分で体を大きく揺らしながら演奏するなど奏者の動きを大きくした。



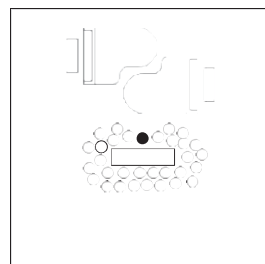
(図12) オーボエの独奏を聴かせる場面

キィの説明の後には、楽器の裏側にある親指の動きまで見られるように子どもたちの前を横切り、裏を見せるような動きを加えながら演奏した。



(図13) オーボエの運指を見せながら演奏する場面

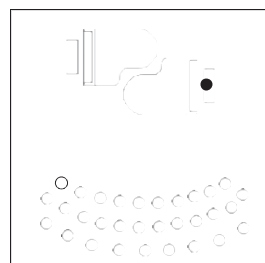
オーボエのリード作成工程を見せる場面では、一度にたくさんの工具を見せることで驚きを与えるために、工具の上に布をかけた状態で机を移動させ、子どもたちの目の前で布を外した。



(図14) オーボエのリード作成工程を説明する場面

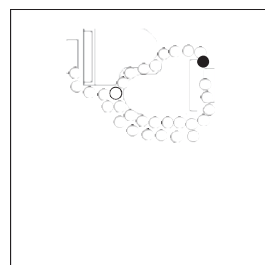
(2) ピアノの紹介と体験活動

子どもの興味を引くために、子どもたちに近い右側のピアノを使用し、あらかじめ蓋を外しておいた。



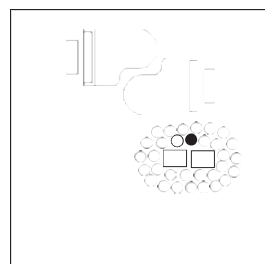
(図15) ピアノの響きや演奏を聴かせる場面

子どもたちをピアノの周りに集まらせて、中を見えやすくした。



(図16) ピアノの仕組みを説明する場面

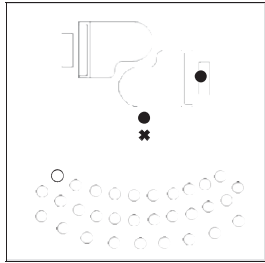
ピアノの部品を手に取らせる時には、子どもの注意を部品に集中させるため、ピアノから少し離れた位置に部品を置いた。



(図17) ピアノの部品を見せる場面

(3) オーボエとピアノのアンサンブル

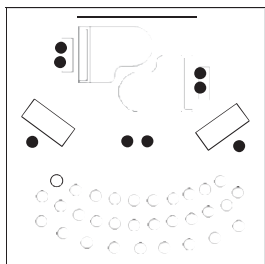
子どもたちがピアノとオーボエを同時に見ることができるよう、オーボエの独奏時よりもピアノに近い位置にオーボエ奏者を立たせるとともに、音量のバランスも考慮した立ち位置とした。



(図18) オーボエとピアノによるアンサンブルの場面

2) 第2部の視覚的アプローチの工夫

子どもたち全員がすべての楽器、奏者に目が届くようにするとともに、ナレーションを担当する学生が子どもたちの様子を見ながら読み聞かせができるように配置した。



(図19) 動物の謝肉祭を聴かせる場面

また、通常であれば左側のピアノの蓋は全開にして演奏するが、プロジェクターに映し出した映像が見えるよう半開にした状態で演奏を行った。

Ⅲ. 実践中の子どもの様子

1. 第1部の子どもの様子

1) オーボエの紹介と体験活動

後方より演奏しながら登場

子どもの様子：はじめキョロキョロと音のする方を探し、後ろから聞こえることに気が付くと振り向き音を聴く。

自己紹介

子ども：オーボエという楽器について、知らないと言いつつ首をかしげている。曲名は、「どこかで聞いたことある気がするけど・・・なんだっけ？」

「知っている気がする」と聞いたことがある、という反応を示す。

キィを押し音程を変える体験



写真1 キィを恐る恐る押す子ども

子どもの様子：キィを押すことになった子どもは、キィを押した瞬間に音程が変わったことにビックリした様子。見ている子どもたちからは「オ～」と歓声上がる。

「風笛」演奏

子どもの様子：指の動きに集中した様子で演奏を聴く。近くに寄ると楽器の後ろを覗き親指の使い方まで真剣に見つめる子どももいた。

吹き口（リード）の説明



写真2 オーボエの吹き口を覗く子どもたち

リード材となる葦を配布

子どもの様子：葦に息を入れてみたり、穴からのぞいてみたり、叩いてみたり葦の感触を楽し

んでいた。



写真3 葦を手にリード工具を見る子どもたち

リード作り実演

子どもの様子：様々な工具にビックリしたようです。ガウジングマシンで葦が削れていく様子を不思議そうに眺めたり、削りかすを手にとったり、工具を触ってみたいと興味を示す。

リード試奏体験

子どもの様子：「吹きたい」とたくさん手が上がった。代表して2名の子どもがストロー笛を吹き、うち1名は音が出た。子どもたちからは歓声の声があがり、音を出すことができた子どもは嬉しそうであった。



写真4 ストロー笛を吹く子どもと、それを見つめる子どもたち

「チャルメラ」演奏（ストローリード）

子どもの様子：音が出た瞬間、歓声や笑い声があがった。リードの素材が違うだけで音色の変化が大きいことにビックリした様子。

リード作成工程を説明

子どもの様子：2か月かけて作ることに驚いた様子で、「どれくらい使えるの？」と質問が上がった。

リードの使用限度を説明

子どもの様子：一日しか持たないことを伝えると「へえ～」と声もれ、強い関心を示していた。

「オヴィディウスによる6つの変容」より“バックス”演奏

子どもの様子：演奏中は真剣に音色を聴いていた。場面が変わる部分で、母親と顔を見合せて「今変わった」というのを確認している子どもが数名いた。演奏後に情景や音色の変化を確認し、ほとんどの子どもたちが大きく頷いた。

2) ピアノの紹介と体験活動

ピアノの素材について説明

子どもの様子：ピアノの素材は？の問いに「木！」と、数人がすぐに答えた。ピアノの周りに来ても良いと伝えるとピアノの周りに駆け寄って集まり、いろいろな部分を叩き、ピアノが木と鉄骨でできていることを確認する。

オルゴールによる響きの実験

子どもの様子：オルゴールをピアノに置いたり、離したり繰り返すごとに、子どもたちは声を上げて驚いていた。



写真5 オルゴールで響きの実験

「ロミオとジュリエット」演奏

子どもの様子：ピアノの下にもぐり、喜んで

キャーキャーと歓声を上げながらピアノの音を聴いていた。



写真6 ピアノの下へもぐる子どもたち

ピアノの部品に触れる体験



写真7 さまざまな部品を手にする様子

子どもの様子：部品を手にとり不思議そうに見ている。手にした部品がピアノのどの部分に使われているのかを、ピアノの内部をのぞいて確認するなど興味を示していた。

弦の長さや重さを知る体験

子どもの様子：弦を手にした子どもは「重い」「銅が巻いてある」と感想を述べながら、弦を握ったり、揺らすなどして関心を寄せていた。



写真8 弦を手にする子どもたち

「星の鏡」演奏

子どもの様子：低音の弦が共鳴して作り出す残響を7分間、じっと静かに耳をかたむけて聴いていた。

3) オーボエとピアノのアンサンブル

「オーボエ・ソナタより第1・3楽章」演奏

子どもの様子：オーボエとピアノを交互に見ながら、真剣に演奏を聴いていた。



写真9 真剣な表情で聴く子どもたち

2. 第2部の子ども様子

電子オルガンによる効果音の説明

子どもの様子：「この音はなんの音？」の問いに「象！」「海！」「水！」「波！」「ハーブ」「チェロ」「シロフォン」「木琴」とそれぞれ間髪入れずに大きい声で答える。中には、楽器の演奏のしぐさをして見せる子どももいた。

「動物たちの謝肉祭」演奏

子どもの様子：迫力のある演奏に驚いた様子で演奏に耳を傾けていた。効果音のする方や、旋律を奏でている楽器、スライドや演奏者などを目で追いながら、真剣に演奏を聴いていた。



写真10 動物の謝肉祭の様子

クラリネット登場シーン

子どもの様子：驚いた表情を見せ、拍手が起こった。



写真11 突然クラリネットが登場

演奏後

子どもの様子：電子オルガンとピアノの周りに集まり、演奏した学生たちの説明を受けながら、鍵盤を押してみたり、自分が知っている曲を弾くなどして、とても興味を示していた。



写真12 電子オルガンに触れる
子どもたちと説明をする学生

IV. アンケート調査の結果と分析

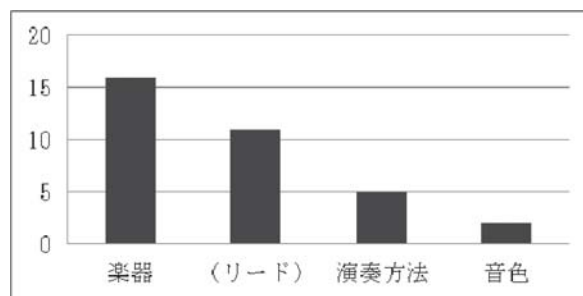
アウトリーチ活動の成果をみるために、第1部、第2部のそれぞれのアウトリーチが終了した直後に、子どもと保護者対象に自由記述による感想文のアンケート調査を実施し、子どもと保護者の興味の対象や記述内容についての分析を行った。

対象者は、参加児童16名で、有効回答数は16名、有効回答率は100%であった。保護者は10名で、有効回答数は10名、有効回答率は100%であった。

1. 結果

1) オーボエの紹介と体験活動に関する子どもの感想

オーボエに関して、「オーボエを初めて知った」という子どもが2名あり、多くの子どもが、楽器について「初めて知ったことがたくさんあった」と記述している。その中でも特にリードに関する記述が11名と一番多く、「リードが奏者の手作りである」「1日の演奏で使いものにならなくなる」という説明に強い興味を示していた。



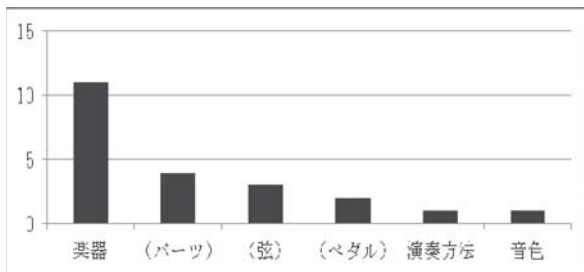
(図20) オーボエへの興味の対象

「吹き口が小さいので、演奏するときに苦しうだった」と5名が記述し、「ストロー笛でも音が出なかったので、私にはオーボエは吹けないと思う」「私は、リコーダーでも息がもたないのに、オーボエはちょっと無理だと思う」など、自分の経験に照らし合わせた感想もみられた。

2) 第1部、ピアノの紹介と体験活動に関する子どもの感想

ピアノに関しては、「ピアノを習っている」と書いた子どもも数人いたが、それにもかかわらず、「ピアノの中は見たことがなかった」「いろいろな部品があるのを知らなかった」といったように、なじみのある楽器に対する意外性に驚いたという感想が多かった。

子どもたちは、楽器の部品を手にとって触ったことによって細かいところまで観察しており、ピアノ内部のダンパーやハンマー、弦に関する記述が多くみられた。中でも、「ピアノには、木の部分とスポンジみたいな部分があった」「太い弦と細い弦があった」など、実践者の説明では触れなかった事柄に関してまで、子どもたちが自ら気づいて書いている文章もあった。



(図21) ピアノへの興味の対象

3) 第1部、オーボエとピアノによるアンサンブルに関する子どもの感想

「オーボエだけの曲とオーボエとピアノの演奏と聞いてよかった」「ピアノとオーボエのひみつをしれてよかった」「ピアノとオーボエにはいろいろな音があるとわかった」などの感想があった。

4) 第2部、動物の謝肉祭に関する子どもの感想

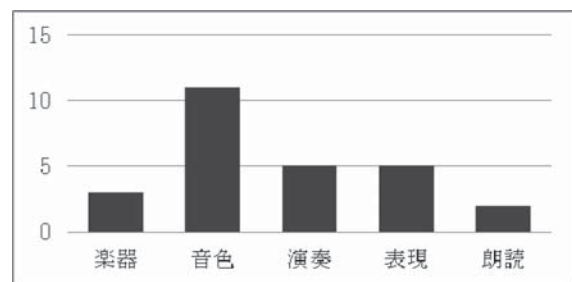
子どもたちの第2部の演奏に関する記述には、「すごかった」「びっくりしました」「おもしろかった」という言葉がとて多く使われていた。

その対象となったのは、「たくさんの音や動物

の声を聞いた」「音がきれいだった」というように効果音への興味や音色の美しさに関わるものが最も多く、次いで「クラリネットとピアノを両方演奏できる人がすごい」という演奏に関する記述や、「迫力のあるところと、ゆったりしているところがあった」「いろいろな表現のしかたがあった」など音楽的な表現に関わるものも多かった。

12手のピアノ演奏に対する反応も多く、「迫力があった」がほとんどであったが、「いろいろな高さの音がまじっていたのがおもしろかった」と、ピアノ独奏との違いとの気づきを書いている感想もあった。

映像と朗読、演奏との組み合わせは、「音楽とお話がよくあっていて、すごくきれいだった」「お話の人の声がきれいだった」と記述しており、「まるで3Dみたい」「海で泳いでいる感じ」という想像力豊かな感想もあった。



(図22) 「動物の謝肉祭」への感想の対象

5) 感想文に表わされた子どもの意欲

「中学生になったら、吹奏楽に入って、オーボエにチャレンジしたい」「オーボエを作りたい」という初めてのことへの意欲を示すものや、「グランドピアノをひいてみたい」「エレクトーンをもっと上手になりたい」という経験がすでにある楽器に対しても、さらに積み重ねたいという学習意欲を示す記述がみられた。

2. アンケートの分析

多くの子どもたちが、第1部の体験型ワークショップを通して、「はじめて知りました」「はじめて触りました」「はじめて見ました」と新しい発見に対する記述をしており、さらに、「〇〇がわかった」「知ることができて、よかった」という知識の習得に対する喜びと満足を表わしていた。特に、オーボエでは、リードに関する記述がもっとも多く、ピアノに対しては部品やピアノ弦

に関する記述が多くみられた。これは、オーボエのリード材やピアノのハンマーヘッド、ウィッペンやピアノ弦を、子どもたち一人ひとりが、実際に手に取り、間近で見ることによって得た発見である。「オーボエの吹き口が小さかった」ことに注目した児童は、「吹くときにすごく苦しそうでした」と記述を続けており、演奏者の説明を受けて得た知識をもとに演奏にも強い興味を示している。さらに、楽器の仕組みや演奏に興味を持った児童は、続けて「オーボエにチャレンジしてみたい」「グランドピアノをひいてみたい」「もっと音楽が好きになった」という楽器演奏や音楽鑑賞に対する意欲を見せている。子どもの新しい発見は、知識の習得につながり、そこから大きく引かれた興味は、さらに次への興味と意欲を引き出すものと考えられる。これは、普段、手の届かないところへ活動し働きかけるというアウトリーチ活動の大きな効果であるといえる。

また、演奏を中心とした第2部では、楽器の音色や音量、音楽的な効果に対して「きれいだった」「迫力があつた」と感心や感動を表す際に、「すごいなあと思いました」「びっくりした」「意外だった」という記述がとても多かった。これは、今回の活動内容が「子どもたちが学校の音楽室などで見ることが少ない楽器に触れさせたい」「大きな楽器編成による演奏を聞かせてほしい」という公民館からの要望に応え、日常から離れた体験を与えることによって、子どもたちの感心と感動を引き出すことができたと考えられる。

さらに、第1部の感想で実践者の説明を受けてそのままの言葉を書いたものが多かったことに比べ、第2部の感想では「クラリネットがオーボエとはちがっていた」「ピアノは、いろいろな高さの音がまざっていた」「ペダルが長いほうの電子オルガンのほうが、効果音がたくさんあつて迫力があつた」「迫力があつるところと、ゆったりしているところがあつた」と、音色や楽器に対して子ども自身が気づいたことを自分の言葉によって書いている文章が多く、「おもしろかった」「すごかった」「きれいだった」と結んでいる。美しい音楽に触れたという感動が、単に演奏の鑑賞だけによるものではなく、楽器のしくみや楽器に触れて得た知識によってさらに深くもたらされていることがわかる。これは、子どもたち自身が、体験型ワー

クショップと鑑賞で構成された2部のアウトリーチ活動を通じて、音楽の聴き方や楽しみ方を学んだ結果であるといえるだろう。

一方、保護者の感想には、「ていねいな説明」や「手で触れた」ことがよかったという感想、第2部に関しては、「映像と朗読をまじえながらの演奏がよかった」という感想が多く、「よい体験」「貴重な体験」だったと大多数の保護者が書いている。また、「子どもが興味を持っていた」「子どもたちもよろこんでいた」と子どもの様子に対して満足を表す記述をしている保護者もいたが、多くの保護者は、「子どもも親も初めて知ることばかりだった」と一緒に楽しんだという文章とともに、「音楽の奥の深さを感じた」「曲を聴いて、なつかしかった」という保護者自身がアウトリーチ活動に対して満足や喜びを感じていることを示す感想を述べていた。

「小学校や社会教育施設などに出張してほしい」「ほかの楽器も聞きたい」といったアウトリーチ活動の継続を求める記述もあった。また、「子どもにも、こういう環境で楽しく音楽を学んでほしいと思った」「音を通して、これからもいろいろなことを経験させたい」といった音楽学習を通じた子どもの成長に期待をする保護者もあり、これらの保護者の反応は、子どもたちがアウトリーチ活動によって得た音楽に触れる喜びを、さらに次への意欲や関心へとつなげる助けとなるであろう。

V. 考察

今回の実践において、ビーチングの挙げる3つの目標を達成するプログラムであったかどうか考察を行った。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">①参加者を巻き込むこと、参加意識を持たせること。②前向きに聴く技術を伝え、磨きをかけられるように導くこと。③参加者を、音楽がすばらしいと思える「秘密」に触れさせてあげること。 |
|---|

子どもたちは楽器の部品に触れる、ストローリードを試奏する、ピアノの下にもぐって音を聴くなどの初めての体験活動に非常に積極的に参加していた。実践者のすぐ間近で「聴く」「見る」

「触れる」というアプローチの方法も大きな効果があった。これらの体験は、新たな発見を生み、それによって得た知識は、子どもの興味と関心を大きく引くことができた。

また、楽器について説明した後の演奏では、演奏者の指の動きをじっと見る、吹き口に注目するなど、子どもの視線の方向や集中の仕方に変化が見られた。このことは感想文の記述にも現れており、子どもたちが実践者の説明を細かく聞き、深く理解して、演奏を聴いていたことがわかる。

さらに、第1部では、実践者の説明をそのまま記述していたのに比べ、第2部の子どもたちの感想文では、「クラリネットの音は、オーボエとはちがっていた」「ピアノは、いろいろな高さの音がまざっていた」「ペダルが長いほうの電子オルガンのほうが、効果音がたくさんあった」「迫力のある部分とゆったりした部分があった」などと、楽器の音色や曲想に対して子ども自身が気づいたことを自分の言葉によって書いた文章が多く見られ、「おもしろかった」「すごかった」「きれいだった」と感想を述べていた。

このように、音楽に対する興味は、単に演奏の鑑賞だけによるものではなく、楽器のしくみや楽器に触れて得た知識によってさらに深まり、細やかな気づきへとつながっていったことがわかる。ワークショップ型と鑑賞型で構成された2部のアウトリーチ活動を通じて、子どもたちに音楽の聴き方や楽しみ方を伝えることができた結果であるといえるだろう。

一方で、「オーボエは、自分には無理っぽいと思った」「ピアノを習っているけど、難しいのは弾けない」というマイナスの印象を示す感想文もみられた。これは、子どもの関心を引くために、演奏技術の難しさや目新しい演奏方法を強調しすぎたことが原因であると考えられる。しかも、ほとんどの子どもたちの興味と関心は、初めて体験した楽器や演奏に対して強く向けられており、子どもたちが、今回のアウトリーチ活動を非日常的な体験として受け止めたことも考えられる。

ただ単に子どもたちがアウトリーチ活動に楽しく参加をするだけでは、「芸術や芸術家を身近に感じるきっかけとなる」というアウトリーチ活動の本来の役割を果たすことはできない。習得した知識や体験を生かすには、次への音楽体験への意

欲を持つことが必要であり、そのためには、アウトリーチ活動を通して、子どもが聴衆としての喜びを知り、音楽をすばらしいと感じることが大切である。この聴衆としての喜びを伝えることが、ビーチングの言う「音楽をすばらしいと思える秘密に触れさせてあげること」であり、アウトリーチ活動が知識の習得や体験活動の機会だけに留まらないように、音楽本来の美しさや楽しさ、演奏する喜びを伝える内容に重点をおいたプログラム作成を行うべきであると考えられる。

おわりに

今回の実践によって、アウトリーチ活動が子どもたちに音楽の聴き方や楽しみ方を伝え、音楽に触れる喜びや意欲を引き出していることがわかった。しかし、このアウトリーチ活動によって得た子どもたちの喜びや意欲も、1回限りの活動で終わってしまったのでは、次の音楽活動に生かされることが難しい。子どもたちにとっては、アウトリーチ活動の継続が必要であると考えられるが、それには、保護者の理解と協力が必要である。感想文には、子どもたちだけでなく保護者自身も音楽に触れた感動と喜びや、アウトリーチ活動への満足感を表わしており、今後の活動の継続が期待できる。

最後に、本稿で報告したアウトリーチ活動を体験した小学6年生の女子3名が、「中学に入ったら、吹奏楽部に入りたいと思った」という感想文の通りに、2ヶ月後の中学入学と同時に、吹奏楽部へ入部した。私たちの行ったアウトリーチ活動による体験が、吹奏楽部への入部のきっかけとなったのであれば、実践者としては、何よりの喜びである。

今後も、活動内容や方法の研究を行い、効果的なアウトリーチ活動の可能性を探っていきたいと考えている。

引用文献

- 1) アンジェラ・マイルズ・ビーチング著、箕口一美訳『BEYONDO TALENT 音楽家を成功に導く12章』水曜社 217頁
- 2) アンジェラ・マイルズ・ビーチング著、箕口一美訳『BEYONDO TALENT 音楽家を成功に導く12章』水曜社 217頁-218頁

- 3) 林(近藤)睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究－音楽家と学校の連携を中心に－」
大阪大学大学院文学研究科 博士論文 2003年 4頁
- 4) 林(近藤)睦「音楽のアウトリーチ活動に関する研究－音楽家と学校の連携を中心に－」
大阪大学大学院文学研究科 博士論文 2003年 4頁

参考文献

- ・平成20・21年度 文化・芸術による地域政策に関する調査研究「新「アウトリーチのすすめ」～公立文化施設、文化・芸術による地域に活力をもたらすために～ [報告書] [資料編①アンケート調査] [資料編②国内事例調査]」財団法人地域創造 2010年
- ・「地域文化施設に活力を－これからの運営のあり方を考える－」財団法人地域創造 2003年
- ・「アウトリーチ活動のすすめ」地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究－報告書－」財団法人地域創造 2001年
- ・的場康子「アウトリーチ活動の意義・課題についての一考察」ライフデザイン研究本部LIFE DESIGN REPORT, 2003年
- ・TANアウトリーチハンドブック制作委員会編『NPOトリトン・アーツ・ネットワーク アウトリーチハンドブック』2007年 パンセ・アラ・ミュージック
- ・山崎由可里、山名敏之、菅道子「静けさを聴く」ことをテーマにした参加型音楽コンサートづくりの試み－教員養成における芸術教科と障害児教育の「融合カリキュラム」その2－ 2007年
- ・植田恵理子「協働を意識した表現活動－参加型音楽活動がもたらすもの－」花園大学社会福祉学部研究紀要 第18号 2010年
- ・岡部裕美、鈴木香代子「学校と演奏家の連携による音楽教育の可能性－継続的なアウトリーチ活動の事例を追って－」千葉大学教育学部研究紀要 第58巻 2010年
- ・梶田美香「地域全体を対象にしたアウトリーチを目指して－小学校へのアウトリーチを参観した保護者の変容から－」音楽芸術マネジメント 第2号 研究ノート
- ・佐野美奈「音楽経験プログラムによる活動実践

の導入過程における学生の意識の変容－授業実践「保育指導法表現Ⅰ・音楽とリズム」の意識調査から」日本音楽教育学会 vol. 7 no. 3 2010年

- ・梶田美香「音楽科におけるアウトリーチの効果－小学校からの実践報告－」日本音楽教育学会 vol. 14 2010年
- ・佐藤一子、増山均編『子どもの文化権と文化的参加－ファンタジー空間の創造』第一書林 1995年8月
- ・伊藤裕夫、片山泰輔、小林真理、中川幾郎、山崎稔恵『新訂アーツ・マネジメント概論』水曜社2004年11月
- ・林容子著、東郷禮子編集『進化するアートマネジメント』 有限会社レイライン2007年5月